

新たなシンフォニーを奏でる国際性豊かな学校

～多様な文化・価値観との共生を図る～

千葉市立高浜第一小学校 校長 三浦 昌宏

1 研究の背景

文部科学省(令和6年8月発表)によると、公立学校における日本語指導が必要な児童生徒数は、10年前と比較し2倍超の69,123人となった。年々増加のスピードが速くかつ確実に刻まれている。

このような状況を鑑みると、日本における、これからの更なる人口減少や外国人受け入れの加速に伴い、全く日本語が話せない児童生徒と生活し学んでいく今までになかったスタイルが、どの学校、どの学級でも当たり前になり、その状況を前提にして教育活動を進めないと学校自体が成り立たなくなる日がいずれやってくることが想定される。7万人に迫る日本語指導が必要な児童生徒の個別の状況も踏まえた上で、学校での学びをどのように捉え進化させていくかが、今後の鍵になるだろう。

2 主題設定の理由(本校のこれまでの現状及び研究の方向性)

本校の歴史を紐解くと、昭和62(1987)年に全校のわずか0.3%に過ぎなかった外国にルーツをもつ児童が、平成8(1996)年には10%に達し、校内に日本語指導教室が開設された。現在7か国(中国、モンゴル、ベトナム、フィリピン、ナイジェリア、アフガニスタン、ブラジル)、56%の外国にルーツをもつ児童が在籍し、3人の日本語指導専科教員が配置されている。学年によってはクラスの3分の2が外国にルーツをもつ児童であり、昼休みや給食の時間だけではなく、授業中も多言語が飛び交っている。また、言葉の壁だけではない、考え方や慣習等の違いによる様々な壁も存在する。

そこで、本校では、長年積み重ねてきた国際教育に関する実践を基にし、「①誰もが取り組める、②特別ではない、③普段の授業+α」の3つをコンセプトに掲げた授業等の構築を進めていくこととした。そして、国籍や文化や考え方の異なる児童が自らに備わる個性を大いに発揮し、教室に新たなシンフォニーを奏でる国際性豊かな学校(異なる様々な楽器が音を出し合い協和していく、オーケストラの交響曲のような授業・教室・学校)を目指した国際教育の研究を進めることとした。

3 研究の目的と方法

(1)研究の目的

- ・互いの考えや文化を認め合える児童並びに基礎的・基本的な日本語が習得できる児童を育てるための授業の在り方を探る。

(2)研究の方法

- ・各教科等における国際教育につながる教科研究等を3つのコンセプトを基にして実践する。
- ・日本語指導教室における指導の充実と各学級との連携を継続し更に深める。

4 研究の内容

(1)研究の視点

【各学級】互いの考えや文化を認め合える授業の工夫(相互理解)

【日本語指導教室】基礎的・基本的な日本語が習得できる授業の工夫(言語理解)

【各学級】「互いの考えや文化を認め合える授業」を以下のように捉える。

- ・それぞれの母国、言語、環境等の違いにより異なる考えをもつことを理解し合いながら、互いに考えを述べ合い、それぞれの考えのよさに気付いたり、自分とは違う考え方を認めたりすることができる授業(→人とのつながりを中心に据えた授業)。

- ・今まで知らなかった外国について知ることで、他国の文化や考え方の違いに気付き、それぞれのよさに気付いたり、自分とは違う考え方を認めたりすることができる授業(→知識や理解を中心に据えた授業)。

【日本語指導教室】「基礎的・基本的な日本語が習得できる授業」を以下のように捉える。

- ・日本語の基礎的・基本的な知識や技能を獲得し、学校生活への適応を図る授業(→初期指導が必要な児童に対する個別授業)。
- ・学級での学習に積極的に参加できるように、理解・表現・記憶支援等を行い、語彙力、思考力、表現力を育てる授業(→教科につながる指導が必要な児童に対する個別授業)。

(2)研究の実際

①道徳の実践(第2学年) ・主題名「みんな 友だち」

※資料として、自作の「はなせない ねこさん」を使用

【視点①地域及び本校の実態を考慮した、自作資料での授業構成】

本学級には、日本語でのやり取りで互いの意思疎通をすることが難しい児童が半数ほど在籍している。そのため、教科書教材の「およげない りすさん(誰とでも仲良く助け合うことについて学ぶ資料)」の学習を通して、どの友達とも仲良くしようという心情を育てたいと考えた。しかし、言葉の壁により、その気持ちを実生活で生かしきれないケースが生じることが容易に予想された。そこで、本学級の実態を考慮し、「言葉の通じない友達との具体的な関わり方」について扱ったオリジナル資料を用いた学習を追加し、授業を構成した。

本資料は、さる、いぬ、りすの3匹が、言葉の通じないねこを誘って公園で一緒に遊ぼうとするが、遊びのルールが伝えられずに困るという内容である。この状況をどのように解決し、遊んでいけばよいかを考えさせた。仲間に入れてもらえて嬉しかったねこの気持ちや、一緒に遊べてよかったという仲間に入れた側の気持ちに共感できるようにした。その結果、言葉の壁がある友達とも積極的に仲良くしようとする心情や態度がこれまで以上に身に付き、実生活においても温かなやりとりをする一面を垣間見ることができた。

【視点②児童の実生活に近い場面を想定し、本音や感情を表出させる役割演技】

本時のねらい達成のため、学習の中で言葉が通じない友達に遊び方の説明をする場面の役割演技を取り入れた。言葉の通じないねこの役を教師が演じ、並び順を抜かしたり日本とは異なるじゃんけんを出したりする等、遊びに誘った3匹の役の児童が困る場面を意図的に作るようにした。そして、ねこにどのような説明をしたらよいのか、相談しながら演技を行うことにより、言葉の通じない友達と遊ぶときに起こりうる困り感を具体的に経験させた。

様々な工夫をしながら遊びのルールやじゃんけんの仕方の伝達を図る活動を通して、言葉の通じない友達とコミュニケーションをとることは、大変ではあるが楽しいことだと気付くことができた。また、遊びに誘ってもらったねこの気持ちを想像させることで、言葉が通じず不安な状態にいるときに声を掛けてもらうことは本当に嬉しいことだということも押さえることができた。

また、役割演技後に、「仲の良い友達だけで遊んだほうが楽なのではないか。」と発問で揺さぶり考えさせた際は、前時に学んでいた「皆で生活するときには、自分の都合だけでなく、相手の気持ちも考えながら行動することが大切だ。」という考えに辿り着く姿が見られた。仲よし同士で過ごす時間はもちろん大切だが、たとえ言葉の壁はあっても周りを見て皆で生活することのよさや大切さへの意識も高めることができた。

②社会科の実践(第6学年) ・単元名「世界に歩み出した日本」(明治時代)

※日本の国力が充実し国際的地位が向上するために何を優先するべきだと考えるか。

【視点①仮想首相へのプレゼンテーションの設定】

本学級に在籍する児童のルーツは3か国にわたる。歴史学習において、様々な視点から歴史的事象に対する根拠に基づいた自分の考えや経験を伝え合う機会を設けることが主体的な学習を導き、思考

や理解等を深めることにつながると考えた。

そこで、本単元のまとめとして、「明治時代に、もしも自分が首相に進言する立場の役人だったら、我が国の国力が充実し国際的地位が向上するために何を優先するべきだと考えるか。」という問いを立て、その優先すべき方策を考え、グループで話し合い、首相に提案する仮想の活動を設定した。そのために、児童は学習で取り上げられた歴史的事象について、優先する価値の高い順のランク付けとその根拠を1時間の学習毎に整理・更新していった。そして、まとめの過程で、それらの歴史的事象を「戦力」「国際貢献」「欧米化」の3つに分類し、3～4人のグループで自分の考えを伝えたり、相手の考えを聞いたりしながら、最終的にグループとして仮想首相に提案するランク付けをした。その後、学級担任を仮想首相と見立て、学級全体でプレゼンテーションを行った。

このような活動を通して、たとえ自分と同じランク付けであっても根拠が違っていたり、自分とは異なる視点で歴史的事象を捉えたりしていることに気付くことで、思考や理解等を更に深めることにつながった。

【視点②タブレットPCを活用した振り返りの工夫】

学習したことを根拠にした活発な話し合い活動を行うためには、自分の考えを整理し他者に伝えられるようにしておくことが必要である。そこで、毎時間の授業終末の3分間ほどを「今日のまとめタイム」とし、学習内容を振り返る時間をとった。その際、タブレットPCに搭載されている学習支援用ソフトを活用し、まとめの過程に向けた「歴史出来事カード」を並べ替えたり、自分なりに考えたことを記録したりしながら学び進めた。このように、歴史の流れ全体も意識しながら自分の考えを構築していくことで、話し合い活動に向けた素地を養っていった。

本時は公開研究会としても設定されていたため、児童だけではなく、他校等からの多くの参加者からも各グループのプレゼンテーションに対する振り返りとして、Google Formsで3段階評価してもらった。集約結果やコメントを読む中で客観的な振り返りも行うことができ、改めて歴史的事象に対する認識を深めることにつながった。

③日本語指導の実践(初期指導) (対象児童：中国籍)

・単元名「クリスマスカードをおくろう」 ※色に関わる「イ形容詞」の名詞修飾用法

※日本語指導教室での指導内容 ○サバイバル日本語 ○日本語基礎 ○日本語と教科の統合学習

【視点①「イ形容詞」の名詞修飾用法の理解を図る導入の工夫】

導入の際、今まで学習したいくつかの色(赤や青等)が、「イ形容詞」化して後にくる言葉を修飾することに気付かせるため、帰納的アプローチを用いることとした。具体的には、あか+ほし→あかいほし(赤い星)、あお+えん→あおいえん(青い円)のように、いくつかの例を出した。それらを基に、「色+α」の言葉にするときは色の後ろに「い」が付くのではないかという規則を自ら発見したことで文法規則の理解が進み、習得につながった。

【視点②言葉の定着を図るゲームを用いた練習方法】

導入で理解した「イ形容詞」の名詞修飾用法を定着させるためには、文型練習を繰り返し行う機械的な練習がある程度必要になる。しかし、意味もなく繰り返し聞かされたり言わされたりしていると児童が感じてしまったら、意欲が低下し定着には結び付かないことが容易に予想される。

そこで、反復的な練習の中にゲーム的要素を取り入れることとした。トランプの「神経衰弱」のように、カードをめくりながら発話してく等、1つ1つのゲームはシンプルだが、少しずつ変化を付けて何度も取り組んだ。その結果、児童は繰り返して練習しているという意識をもつことなく夢中になり、楽しみながら言葉を定着していった。

④日本語指導の実践(教科につながる指導：社会科) (対象児童：中国籍)

・単元名「水産業の盛んな地域」 ※カツオの一本づりとまき網漁のそれぞれのよさを調べよう。

※日本語指導教室での指導内容 ○日本語と教科の統合学習 ○教科の補習

【視点①学習意欲を引き出すための具体物や写真等の活用】

本校には、生まれ育った国や家庭での食習慣が影響し海産物を苦手としている児童が多くいる。そのため、漁業や漁船等に対する関心が低いことが予想された。そこで本時では、実際に鰹節のにおいや硬さを肌で感じたり、カツオの模型で大きさや重さ等を体感したりすることで、魚への興味や関心をもてるようにした。また、取れたカツオの数や状態等がわかるものを写真や動画で視聴したことで、本時で押さえる「一本釣り」と「まき網漁」を比較しながら、それぞれの手法のよさに気付くことができた。このように、具体物や写真等を使って視覚化させたことで、言葉と結び付けながら理解を促すことができた。

【視点②適切な答え方ができるような問い掛け】

児童と教師とのマンツーマンでのやり取りを通して、「なぜ～だと思えますか。」という理由を問う発問を多くし、「～だから～だと思えます。」等の適切な答え方に慣れるようにした。また、主語と目的語が逆になる等の間違った言い方(例えば「プランクトンがカツオを食べたいから。')をした場合は、その都度確認しながら正しく話せるように指導を進めた。

単元を通して取り出し指導を行っているため、漁業に関わる日本語や問いに対する適切な答え方についても丁寧に進めることができ、児童の学習言語としての日本語習得に前進が見られた。

5 研究のまとめ（成果と課題）

児童同士の相互理解を進めるため、どの学年でも掲載した実践の他に、学級の実態に合わせて授業の工夫を行った。日本語指導対象児童に対しては、翻訳ツールを活用した画面共有や翻訳の送信、大型テレビ表示等を行うことで、友達との考えの共有や学習内容等の理解につなげることができた。また、学習の中で、外国にルーツをもつ児童の母国等、その国についての内容を取り上げたり日本と比較したりすることで、互いの国のよさや違いについて感じる事ができた。特に歴史や貿易等の学習では、多国籍の友達と学んでいるからこそその考え方の広がりが見られた。

一方で、どの教科においても児童の日本語理解度に合わせた個別指導を行いたい、一人の担任がクラス全体での学習と同時に進めることが難しい状況もある。担任+αでの体制をできるだけ多くの授業で組めるように教育課程の工夫を今後も続けていきたい。

最後に、普段の5年国語の授業での一場面を挙げる。

○国語科5年「言葉の意味が分かること」 ※母語ではない言語を学ぶ際に生じるエピソード

…「朝食にスープを食べました。」これは、アメリカ人の留学生が言った言葉です。日本語では、スープは「飲む」と表現することが多いため、日本語を母語とする人が聞くと、やや不自然に聞こえます。…(教科書より抜粋)

【T担任, CS中国児童, JS日本児童, AS全児童, AC全中国児童】

T : 日本語の「スープを飲む」は、中国語では「飲む」と表現する? 「食べる」と表現する?

CS1 : 中国でもスープは「飲む」だよ。飲み物は「飲む」、食べ物は「食べる」だよ。

T : スープは食べ物じゃないの?

JS1 : 「飲む」は液体で、「食べる」は固体ってことじゃない?

AS : おお、なるほど。(皆、頷く)

CS2 : でも、日本だと薬は「飲む」っていうけれど、中国では「食べる」だよ。そうだよ。(中国の友達に問う)

AC : うん、そうだよ。(中国児童の皆が口々に)

JS2 : ああ、なるほど。確かに、薬は固体だからかな?

JS3 : じゃあ、なんで日本では「飲む」なのかな?

上記の場面は、日本人にとって当たり前である「薬を飲む」という表現が中国では「薬を食べる」となっており、自分自身の「飲む」に対する言葉の意味理解を振り返り、認識を広げ深めようとしている場面である。これは、学級内に外国にルーツをもつ児童が在籍していたことと、教師が臨機応変な問い返しをしたことが相乗効果となり生まれた事例である。ささやかではあるが、私達は、このような「シンフォニー」を日々目指し、目の前で生じる現実に感動し、教育のもつ確かな可能性を噛みしめている。様々な楽器が奏でる音色が見事に調和し、美しく響き合うオーケストラのシンフォニーのような「近未来の教室」を今日も想望している。

【資料】



【校内掲示板】↑

- ・世界地図を逆に掲示(様々な見方を提示)
- ・世界遺産を校内の様々な場所に掲示(日本とは異なる文化や自然を提示)



【校内掲示板】↑

- ・在籍児童の母国を中心に世界の挨拶を掲示(教室では帰りの会等で児童の母国の挨拶をすることも)



←【日本語指導教室(なのはな学級)】

- ・特別な教育課程を編成し、3名の日本語指導専科教員と2名の外国人指導員(中国語、フィリピン語)で取り出し指導を実施
- ・「文化的言語的に多様な背景を持つ外国人児童生徒等のための対話型アセスメントDLA」を参考にし、日本語初期指導(前期・後期)、教科につながる指導の3段階に分けて教師1名対児童1～4名で授業を実施

【世界の料理を知ろう】→

- ・給食の献立として、本校在籍児童の国の料理を毎月提供している。(放送あり)
- 《ベトナム編》
 バインミー、フォー・ガー、バナナケーキ、牛乳



皆さん、こんにちは。給食室の〇〇です。今日は「世界の料理を知ろう」のベトナム編です。

ベトナムは、東南アジアにある国で、日本から飛行機で6時間くらいのところにあります。農業が盛んで場所によって1年に2回、3回とお米の収穫ができる稲作の国です。日本のように、ご飯をよく食べる国です。中国やフランスとの歴史的な関係があり、料理に関しても中国とフランスの食文化の影響を受けています。例えば、お米やめん、もちを食べたり、お箸や茶わんを使い、お茶を飲んだりする文化は、中国の食文化の影響を受けたものです。また、フランスの影響でフランスパンを食べたり、コーヒーを飲んだりする習慣もあるそうです。

今日の給食の「バインミー」は、ベトナムのサンドイッチです。甘酸っぱい味付けをした「なます」や肉などの具を柔らかいフランスパンに挟んだ料理です。今日は、自分でパンに具材を挟んで「バインミー」を作って食べましょう。「フォー・ガー」は、ベトナムの国民食ともいわれる料理です。レモン汁を加えてさっぱりとした味にしました。「バナナケーキ」は、お米がよくとれるベトナムに因んで米粉を使っているため、もちもちとしています。

それでは、今日のクイズです。今日のスープ「フォー・ガー」に入っている麺は、何からできていますか。①小麦 ②お米 ③いも

正解は、②お米です。この麺のことを「フォー」と言います。先ほどもお話した通り、ベトナムではお米をたくさん作っています。そのため、そのまま食べるだけではなく、フォーにしたり生春巻き「ライスペーパー」にしたりと食べ方も豊富です。因みに、フォー・ガーの「ガー」は、鶏肉という意味です。今日は、ベトナムに行った気分でご飯を食べましょう。

日本語指導通信 “Càihuā” No.80

日常会話はできるが学習につまずいている外国人児童の指導法⑨

語彙力は学習理解に直結します。ここでは語彙について詳しく見ていきましょう。

1 語彙力とテキストの自力読解力との関係

外国人児童生徒が自力でテキストを読みこなすには、テキスト内で使われている語彙の95%から99%程度が分かっている必要がある。

語彙理解力	テキストの理解度
90%から95%程度	ほぼ75%
90%以下	50%を下回る



(Hu & Nation, 2000; Schmitt et al., 2011など)

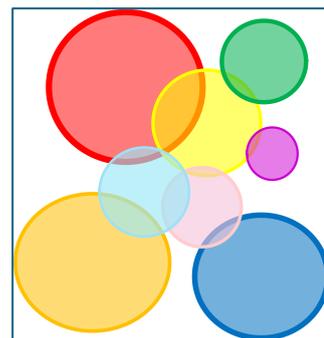
上記の研究の結果から、手助けがない状態で、テキスト（教科書）の語彙について90から95%程度（ほとんど）理解していれば、教科書の内容理解は75%ぐらいであると考えられます。

一方、90%以下の語彙理解力であれば、教科書の内容理解は50%以下という厳しい数字が出ています。これが何を示すかということ、「教師がしっかり語彙を説明しないと、自力ではほとんど読めない」ということを意味しています。なので、語彙の説明はとても大事になります。

今後、自力で様々なテキストを読むことが多くなります。子供にとって難しい言葉をやさしい日本語で言い換えることもとても大事ですが、「産業」などの言葉は、具体例を挙げながら説明し、そのまま使わせることがより大事になってきます。

←【教員研修1】

- ・外国にルーツをもつ児童への指導の際に各担任等が必要な知識や考え方を吟味し、日本語指導主任が週1～2回程度、「日本語指導通信」を発行
- ・上記通信の他に日本語そのものを改めて捉え直すための資料も都度発行



【国際性豊かな学校】↑
・8か国の繋がりを表現

【教員研修2】→

- ・いくつかの異文化シミュレーションゲームを研修に取り入れることで教員全体でも実践する場を設定



【異文化トレーニング：貿易ゲーム】

無作為の4つの国（先進国・開発途上国・後発開発途上国等）に分かれ、資源である用紙を使って定められた商品（長方形や正方形、円等）を作って資金を稼ぐ「貿易ゲーム」を行った。このゲームの特徴は、各国に配当された道具のはさみ（技術）や用紙（資源）等の種類や数量が国によって異なる点である。中には、用紙（資源）しか配当されず、はさみ（技術）がない国もある。そのため、例えば用紙がない国は、はさみがない国に自分たちが持っているはさみの「時間貸し」をして用紙を手に入れる等、各自で交渉をして貿易活動を進めていくことになった。また、どの国でも作りやすい商品（長方形）が市場に多く出回ってくると商品価値が急落するという現実社会のような状況も生じ、困惑する国もあった。

ゲーム後の振り返りでは、「紙（資源）が大量にあっても、はさみ（技術）がないとどうにもならなかった。」「市場のバランスが変わって長方形が供給過多になると、値段が突然変わって戸惑った。」「先進国と他の国々の関わり方を考えるきっかけになった。」等、ゲームに参加した教員にとって、世界経済や国際協調について実践的に考える場になった。



【校内授業研究会】↑

- ・2年道徳（役割演技）
- ・6年社会科（プレゼンテーション）
- ・3年日本語（初期指導）